

次の文章は、橋本紡の小説『葉桜』の一部です。主人公の「わたし」（櫻井さん）は継野書道教室に通う高校二年生で、書道教室の先生に淡い恋心を抱いています。この文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問十六以外はすべて黄色の解答用紙に書きなさい。問十六の答えは、**国語―六の解答**らんに書きなさい。字数の指定のある問題は句読点も一字と数えます。

ずっと同じ和歌を書き続けた。二日、三日とたつけれど、なかなかうまくならない。筆の入りがいいと思っても、たいてい途中で崩れるし、うまくいったと感じても、実は最初から崩れていたりした。書き終えたばかりの半紙をながめるたび、ため息がもれるばかりだった。

「ふう――」

今回もそうで、途中から駄目だろうなと感じていたのだけれど、できあがったものは、思っていた以上にひどかった。漢字と平仮名のバランスが悪い。途中で力が入ってしまったのだ。字もよくないし、空間もよくない。自分の書いたものとは思いたくないほどだ。

1 わが心

春の山邊に

あくがれて

ながながし日を

今日も暮らしつ

この歌には、どこか呑気で穏やかなものがある。わたしが書いたものは、呑気さも、穏やかさも、すべて壊してしまった。字というのは不思議なものだ。わたしは小学生のころから教室に通い続けている。まねるだけならば、なんとかなるだろう。わりと上手に書けると思う。ただ、文字の意味を知り、歌の意味を知り、人の心を知り、それらを込めようとしたとたん、いきなり難しさが増す。

「どうしたの、櫻井さん」

ため息ばかりついていたら、先生が声をかけてきた。

「うまく書けないんです」

どれどれ、と言って、先生はのぞき込んできた。教室を見てまわっていたらしく、朱墨に染まった筆を持っていた。教室には今、二十人近い生徒が来ている。席の半分ほどがうまったところか。

たいていが小学生で、中学生が何人か。高校生はわたしだけだった。

「なるほど、これはよくないね」

「はい」

「余計なことを考えてるふうだ。ああ、なるほど。歌の意味をくみ取ろうとしてるのか。それで妙な崩れ方してるんだ。大切なことだけれど、意識しすぎている」

「わかるんですか」

「字にはいろんなことが出るよ」

「先生なら、どう書きますか」

「僕……」

「ええ、はい」

先生はわたしの顔を見たあと、筆を半紙に落とした。ためらうことなく、すると、いくつかの字を直していく。この字がよくないね。急ぎすぎてる。あと、ここはね、もっと押さえたほうがいい。溜

めるといふか。そうすると、あとの字が伸びるから。ああ、ここで集
中が切れたね。

指摘はすべての確で、**2** ただうなずくしかなかった。そうして先生の朱が乗ると、とたんに文字は落ち着きと勢い、それに思いを得ていた。どこか呑気さを漂わせながら、ただそれだけではなく、なにかを感じさせる。危うさか、寂しさか。言葉にするのは難しいけれど、不安定なものだった。意味を追っていくと、春に浮かれている歌なのに、それだけではなくなる。

先生はどうして、こんな字を書けるのだろう。

わずかに顔を動かし、そばにいる先生に目をやった。穏やかな顔をしているけれど、目に宿る光は「まじ真摯で、遠くを見つめていた。

字を、書くというのを、ただ追い求めている。わたしの下手な作品にさえ、こんな顔をするのだ。**3** 自分の気持ちはずかしくなり、

わたしは顔をふせた。制服のスカートにしわができていく。そのひざに置かれた左手は緩く握られていた。先生の手と比べると、ひどく小さく、弱い。こんな手では、なにも掴めない気がした。

先生はさらに、何力所かに朱を入れた。そうすると、またよくなった。落ち着きが増すのと同時に、不思議なことだけれど、不確かさも増した。危ういくせに、ぎりぎりのところで保っているというか。

いや、ぎりぎりのところで保っているからこそ、危ういのか。

「だいぶよくなった」

満足そうに、先生は言った。

はい、とうなずく。

「先生」

「え、なに」

「どうしたら上手になれるんでしょうか」

4 先生が直した字を、今度はわたしがなぞってみたくなった。そうすれば、ほんの少しでも近づけるだろうか。

「意味を考えすぎるからだよ。それに捕らわれる」

「なにも考えないで書いたほうがいいってことですか」

「いや、違ふよ」

今日の先生も、いつもの先生だった。ちゃんと櫛を通したはずなのに、跳ねている髪がある。少し癖毛なのだ。着ているのはちっとも書家らしくなく、色あせたポロシャツに、細いパンツだった。すごくおしゃれなわけじゃないけれど、だらしないわけでもない。朱墨に染まった筆を**ムソウサ**に持っているのに、どこも汚していなかった。上手な人ほど服を汚さないものなのだ。先生ともなれば、当然のことだった。

「歌の意味を自然と受け入れるんだ」

「受け入れる、ですか」

「まじ紀貫之が歌っていることは明らかだろう」

「はい」

「それを収めるというか」

ううん、とうなつてしまった。よくわからなかった。伝わらなかつ



たことを知った先生は、天井を見上げ、考え込んだ。

「ああ、そうだ」

「なんですか」

「食べるようなものだよ」

「え、食べるって……」

「5 噛んでいるときは、その味がよくわかるよね。今の櫻井さんはそうして書いてるんだと思う。だけど、飲み込んでしまうと、胃に収まるよね。お腹がふくれて、満足する。そのね、満足した状態で書くのがいんじゃないかな」

「なるほど」

「変な言い方だったかな」

「なんとなくわかります。でも本当はわかってないかもしれないです」

「いっぱい書くといいよ。書くことは噛むことと同じだから。」

「^{注3}咀嚼だね。そうしていううちに飲み込んでしまう。胃に収まれば、腹がふくれる。櫻井さんは長くやってるけど、それでもまだまだ。とにかく、たくさん書くこと。上手な人をまねること。いづれにせよ、すっかりまねをするなんてできないんだ。結局、櫻井さんの字になるよ」

「そんなものですか」

「うん」

「時間がかかりそうですね」

「かければいい。櫻井さんが書き終わるまで教室を開けておくから」

「本当ですか。夜の十二時を過ぎてもいいんですか」

「もちろん、と先生はうなずいた。悪戯っぽい顔をしていた。」

「十二時を過ぎても開けておくよ」

そんなことを言い残し、先生は前の席に移動した。座っているのはまだ幼い男の子で、確か小学生になったばかりのはずだ。当たり前だけれど、彼に對しても、先生はわたしと同じように指導していた。とても真剣だ。

ため息がもれた。

なぜなのか。

いくら考えてもわかりそうになかったので、わたしは新しい半紙を取り出し、机に置いた。文鎮で押さえ、表をさつとまで、**セスジ**を伸ばす。筆に墨をつけながら思った。たくさん書くことだ。ひたすら書くことだ。

わたしが書く字は、どうしたって、わたしの字になる。先生が言うのだから、きつとそうなのだろう。

「櫻井さん」

暗闇で声をかけられた。

振り向くと、淡い外灯の光に、輪郭が光った。

「あれ、里奈さん」

「久しぶり」

「びっくりしました」

彼女はわたしの先輩にあたる人だった。継野書道教室に、わたしより三年か四年ばかり早く通っていた。今は都心の大学に進学し、そちらに移り住んでいる。6 彼女がいたころ、ずつとうらやましく

思っていた。テニス部のキャプテンで、明るくて、だれとでも気軽に話せる。彼女はそう、いつも笑っている感じがした。人との触れ合いを、まったくためらわない。わたしがどんなに努力しても、その存在は遠くにあった。手を伸ばしても届きそうになかった。なによりかなわないと感じたのは、彼女の字だった。上手な人なら、他にもいる。わたしが圧倒されたのは、その勢いだった。7 彼女の字を見ると、だれもが、なぜか微笑んでしまうのだ。太陽の光を受けた花のように。ああいう字を書ける人は、めったにいない。

「里奈さん、どうしたんですか」

「用事があったって、こちらに來たからね。先生と奥さんに挨拶をしようと思って」

「ああ」

「お土産に羊羹を置いてきた。我ながら気張ったな」

「高いんですか」

「ものすごく。財布が空っぽ。だけど最高のものを人に届けるっていいね」

うん、気分がいいよ、と彼女はうなずく。

その笑顔、素直さに、わたしもまた笑っていた。

「そんな無理をしなくても」

「先生たちって食べるものにはうるさいから」

やっぱり彼女は笑っている。自転車をおし、暗闇の中、里奈さんと歩いた。やがて敷地を出ようかというころ、里奈さんがなぜか立ち止まった。振り返り、継野書道教室の建物を見つめている。自転車をとめ、同じものに目をやった。教室の窓も、その奥にある居室の窓も、ぼんやりと光っている。夜の八時を過ぎたところで、教室が閉まる時間だった。もしわたしが望めば、先生は本当に十二時まで付き合ってくれただろう。それには確信がある。先生は嘘をつく人ではない。書に関してはいくらでも……こちらが8 □を上げるまであきらめない。今日はわたしが引き上げることにしたのだ。十二時まで書き続けるのは大変そうだったし、先生も迷惑だろうし、だいたい親が気にする。

「里奈さん」

「なに」

「わたし、こうしていると、なんだか変な気持ちになるんです」

「変……」

「寂しいっていうか、哀しいっていうか。先生は明るいですよ。由季子さんはいい人です。理想の夫婦っていうか。見てるとうらやましいなって思っんです。だけど――」

言葉が自然と切れた。里奈さんは、そんなわたしに目をやった。だまっていた。わたしもなにを言っているかわからなかった。視線をもどすと、教室の中を先生が歩いていった。一番奥にある照明を消す。少し歩いて、次の照明を消す。継野書道教室の建物は本当に古く、天井からぶら下がっている照明は、いちいちひもを引っ張って、点けたり消したりするのだ。ボタンひとつで**ソウサ**できるわけではない。

先生は9 律儀な様子で照明を消していった。ひとつ消すごとに、教室は暗くなる。先生の姿が闇にのまれていく。

やがて最後の照明が残った。師範席の上にあるものだ。

先生はいったん、ひもを掴んだものの、すぐには引つ張らなかつた。立っていた。ほんの数秒のことだったろう。たったひとつの、薄い照明に照らされる先生の姿は、孤独に包まれていた。その瞬間、おかしいことが起きた。先生の顔が脳裏に浮かんだのだ。すぐそばにいるかのように鮮明だった。先生の目に宿っていたのは闇だった。どんなに手を掻いても、なにも捕まえられないほど深い深い闇だ。その幻像が消えると同時に、照明もまた消えた。先生はおそらく居室に向かったはずだ。由季さんが待っているところに。けれど、なぜだか、あの闇の中に先生がまだ立っている気がした。瞳にも闇を宿したまま。わたしはなんだか怖くなった。

「はい」
里奈さんは今、ひとりで語っている。たまたまわたしが聞いているだけ。うなずく以上のことをしてはいけない。

「行こうよ」

彼女は穏やかに言った。

わたしはうなずいた。

「はい」

自転車のタイヤが砂利を踏み、ざらざらと音を立てる。10 夜空には細い月が浮かんでいる。街灯に照らされ、わたしと里奈さんの影が薄く伸びる。

やがて里奈さんが言った。

「先生と奥さんは、わたしたちとは違うんだと思う」

「はい」

「とても小さな場所なんじゃないかな」

「はい」

「先生と奥さんだけしかないない」

「はい」

①

里奈さんはなにを言おうとしているのか。なにを尋ねればいいのか。わたしにはわからなかった。うなずくことによって、言葉をうながすだけだ。

ずいぶんたった。時間が必要だった。

「どういうことか教えてもらえますか」

②

「なにかあったんですね」

「そう」

③

「どうして」

問いに答えられないまま、歩き続ける。言ってしまったら、どんなに楽だろうか。けれど、わたしは口にできなかつた。あまりにも重く、あまりにも大切で、心の中で確かめることさえ11 はばかれることなのだ。

わたしはうつむき、だまり、自転車をおすしかなかった。

④

「はい」

12 あんなに書ける人が、世にも出ず、町の書道教室の先生に収まっているのには、それなりの理由があるの」

「はい」

「とても個人的なこと」

今までと同じようにうなずくことはできず、わたしは立ち止まった。さっきの幻像、闇の中にひとり、たたずむ先生の姿を思い出したからだった。自転車の車輪も動きをとめる。街灯の光を受け、スポークの何本かがちらちらと輝いていた。13 □を決して顔を上げると、里奈さんもまた、わたしを見ていた。

笑っている。幸せそうに。寂しそうに。笑っている。

「さようなら、櫻井さん」

「さようなら、里奈さん」

14 気が付くと、そこは十字路だった。里奈さんは右に進んだ。そちらに彼女の実家があるのだ。わたしはこのまますすぐだ。取り残されたわたしは、やがて自転車に乗り、ペダルをいっぱい踏み込んだ。

四日目も、五日目も、六日目も、ひたすら書き続けた。週を越えた。筆に墨を含ませ、半紙に下ろした。どうしてもうまくいかず、失敗が重なるばかりだった。けれど、書き続けるうち、いろいろなことが抜けていった。夏の陽光にさらされた髪が、その色を薄くしていくのと似ていた。七日目だったか、十日目だったか。書き終えたあと、半紙を見た。そこに並ぶ字は、きれいに収まり、穏やかさと、呑気さと、寂しさを備えていた。ふと春の山が浮かんだ。たくさんの花が咲き、芽吹いたばかりの若葉はつやつやと光っている。見とれて、いるうちに日が過ぎていく。どうして自分がこんな字を書けたのか、まったくわからなかった。筆を走らせていたときの記憶さえもない。横を見ると、墨を吸った半紙がたくさん積まれていた。夢中になつて書き続けていたのだ。おそらく百枚以上だろう。

机に置かれた半紙を、書かれた字を見ると、体が少しふるえた。これまで書けなかつた字が書けていた。

15 なにかを超えた。

16 ふるえる手で筆を置き、それから深く息を吸った。気持ちがなかなか落ち着かない。心臓は跳ねまわっている。頭の芯はぼんやりとしている。妙に気持ちよかつた。体中から力が抜けた。どこかに浮いているみたいだ。やがて先生が歩み寄ってきた。

なにもしゃべらない。じっと見ている。

他の生徒たちがぞろぞろと入り口から姿を現し、こんにちとは声を出した。しかし、それにも応じず、先生は字をながめていた。

写

17 太陽がいくらか動き、影が角度を変えた。最初はさわいでいた生徒たちも、課題に取りかかったのか、静かになった。
ようやく先生が言った。

「こういうときがあるんだ。いきなり伸びる。無心にやっている。自分の手がふと伸びて、絶対に掴めないと思っていたところに届く。そう、未来さえも掴めるように感じられるときが」

先生はなにを言っているんだろう。いつもより早口だ。ぼんやり見つめていると、18 先生はやがて苦笑いをした。わたしはなにか声をかけなくなったけれど、思いばかりで、言葉は出てこなかった。

「おめでとう、櫻井さん。本当によく書けていると思うよ。僕の指導

ゆえじゃない。櫻井さんが、君が、自分で道を見つけたんだ。長く君を見てきたけど、これは一番いい字だと思う」

そこにいるのは、いつもの先生だった。

褒められたことが嬉しくて、わたしは顔をふせ、はいと声をもらした。
(橋本紡『葉桜』)

【注】

- 1 真摯・・・ひたむきなこと。
- 2 紀貫之・・・平安時代の歌人。
- 3 咀嚼・・・食べ物をよくかみくだくこと。

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 1 わが心／春の山邊に／あくがれて／ながながし日を／今日も暮らしつ の歌は「私の心は／桜の花の咲く春の山あたりに／うばわ
れて落ち着かないまま／ながながし日を／今日も暮らしてしまった」という意味ですが、

(1) 「私の心は／桜の花の咲く春の山あたりに／うばわれて落ち着かないまま」とはどのようなことを言っているのですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 桜の咲く山の向こうにいる友人を待ちわびているということ。

イ 春の日の長さにうんざりしながら時を過ごしていること。

ウ 桜の花がいつ咲くか、今か今かと心待ちにしていること。

エ 何にも集中できずに一日を過ごしたことを後悔しているということ。

(2) 「わたし」はこの歌の何を自分の字に表したかったのですか。解答らんに合うように文中から九字でぬき出して答えなさい。

問三 2 ただうなずくしかなかった とありますが、この時の「わたし」の気持ちにあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 心外 イ 尊敬 ウ 感服 エ 納得

問四 3 自分の気持ちはずかしくなり、わたしは顔をふせた とありますが、なぜですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 自分の下手な作品に朱を入れる先生の真剣な表情を見て、ほめられると期待していた自分の浅はかさに気付いたから。

イ 自分の下手な作品にも手をぬかずに向き合ってくれる先生の姿にひたむきさを感じ、それに比べて自分はあまいと感じたから。

ウ 先生が字を書くことを追い求めている姿を見て、先生の書家としての才能に今まで気がつかなかった自分を情けなく感じたから。

エ ちつとも書家らしくないのに立派な字を書く先生の姿に比べて、スカートのしわを気にするような自分の未熟さに気付いたから。

問五 4 先生が直した字を、今度はわたしがなぞってみたくなった とありますが、「先生が直した字」とはどのような字のことですか。十五字程度でまとめて書きなさい。

問六 5 噛んでいるときは、その味がよくわかるよね。今の櫻井さんはそうして書いているんだと思う。だけど、飲み込んでしまうと、胃に収まるよね。お腹がふくれて、満足する。そのね、満足した状態で書くのがいんじゃないかな について、

(1) 「噛んでいるときは、その味がよくわかるよね。今の櫻井さんはそうして書いているんだと思う。」とありますが、先生は櫻井さん(「わたし」)が字を書く時のどのような点を問題にしているのですか。解答らんに合うように文中からぬき出して答えなさい。

(2) 「満足した状態で書く」とありますが、「満足した状態」とはどうすることですか。解答らんに合うように文中からぬき出して答えなさい。



問七 6 彼女がいたところ、ずっとうらやましく思っていたとありますが、何をうらやましく思っていたのですか。文中の語を使って、二点にまとめてそれぞれ二十字以内で書きなさい。

問八 7 彼女の字を見ると、だれもが、なぜか微笑^{ほほえ}んでしまうのだ。太陽の光を受けた花のようにとありますが、

(1) この箇所に使われている表現技法を次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 反復法 イ 倒置法 ウ 省略法 エ 体言止め

(2) 「太陽の光を受けた花のように」とありますが、「太陽の光」「花」はそれぞれ何をたとえていますか。具体的に説明しなさい。

問九 8 □を上げる とありますが、この表現は「つらさにがまんできなくなる」という意味です。□に入る漢字一字を書き、その読みをひらがなで答えなさい。

問十 次の(1)(2)の語の意味としてあてはまるものを次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

(1) 9 律儀

- ア 落ち着いて行動していること。 イ 欲を出さずがまんしていること。
ウ 細かいことに気を配っていること。 エ まじめできちんとしていること。

(2) 11 はばかりれる

- ア つらく感じてしまう。 イ おつくうに思ってしまう。 ウ えんりよしてしまう。 エ 不可能になってしまう。

問十一 10 夜空には細い月が浮かんでいる。街灯に照らされ、わたしと里奈さんの影^{かげ}が薄く伸びる とありますが、この風景からはどのような気持ちを読み取れますか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 未練 イ よろこび ウ 寂しさ エ あわれみ

問十二 本文中の①⑤にもっともよくあてはまるものをそれぞれ次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。記号は一回しか使えません。

- ア 時の流れさえとまってる イ あの人たちはあえて生きていくしかないの ウ 全部は無理かな
エ 先生はとても書けるよね オ わたしは知りたいです

問十三 12 あんなに書ける人が、世にも出ず、町の書道教室の先生に収まっている とありますが、里奈さんは先生をどのような人だと考えていますか。解答らんに合うように十五字以上二十字以内で書きなさい。

問十四 13 □を決して とありますが、□に入る漢字一字を答えなさい。

問十五 14 気が付くと、そこは十字路だった。里奈さんは右に進んだ。そちらに彼女の実家があるのだ。わたしはこのまますすぐだ。取り残されたわたしは、やがて自転車に乗り、ペダルをいっぱい踏み込んだ とありますが、ここではどのようなことが表されていますか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 里奈さんと夢中で話していたら思いがけない場所に出してしまったことを表している。

イ 里奈さんと「わたし」が心の底から共感しあえる関係ではないことを表している。

ウ 里奈さんと別れて寂しさをかみしめ、泣きそうになっていることを表している。

エ 里奈さんとそっけないあいさつをして険悪なまま別れたことを表している。

受験番号

写

氏名

問十六 15 なにかを超えた とありますが、「わたし」(櫻井さん)がなぜ「超え」ることができたのか、その要因を考えながら、あなたが「わたし」のように「なにかを超えた」経験を作文しなさい。自分の経験が思い当たらない場合は適切な例を考えて書くこと。答えは左の解答らんに書きなさい。

問十七 16 ふるえる手で筆を置き、それから深く息を吸った。気持ちがなかなか落ち着かない。心臓は跳ねまわっている。頭の芯はぼんやりとしている。妙に気持ちよかった。体中から力が抜けた。どこかに浮いているみたいだ とありますが、
(1) この時の「わたし」の気持ちとしてあてはまるものを次のア～エの中からすべて選び記号で答えなさい。
ア 寂しさ イ 落胆 ウ 苦悩 エ 優越感 オ 達成感 カ 興奮

(2) この「わたし」の気持ちはどのような工夫を用いて表現されていますか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。
ア 反対の意味の言葉を交互に並べている。 イ 短い文をたたみかけるように連続させている。
ウ すべての文において主語を省略している。 エ 比喩表現を用いずに具体的に説明している。

問十八 17 太陽がいくらか動き、影が角度を変えた とありますが、どういうことですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。
ア 「わたし」が外に出たがっていたということ。 イ 夜になったということ。
ウ 不吉な予感がしたということ。 エ 時間が経ったということ。

問十九 18 先生はやがて苦笑いをした とありますが、なぜですか。もつともよくあてはまるものを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。
ア 一所懸命に話しているのに「わたし」の反応が薄かったから。
イ いつもと違って「わたし」に優しい言葉をかけたことに照れたから。
ウ 自分のアドバイスを「わたし」が素直に聞き入れなかったから。
エ 「わたし」が自分の話を全く理解していないことにあきれたから。

ソウサ

を表したかった。

(2)

11

1

[illegible]

(2)	(1)
	点。

点。

て書くこと。

[illegible]

(2)	(1)
太陽の光	
花	

漢字	読み

問 十	(1)
	(2)

11

①	
②	
③	
④	
⑤	

本当は先生は

と考えている。

7

答えは

國語一六

の解答らんに書きなさい。

(1)	
(2)	

11